

さまざまな社会的需要を満たすために大学演習林が果たすべき役割について
-三瓶演習林で行われた公開講座の事例-

尾崎嘉信¹, 寺田和雄¹, 山下多聞²

Roles of the university forest in satisfying the various social needs
- A case study of the extension course held at the Sambe Forest -

Yoshinobu OZAKI¹, Kazuo TERADA¹ and Tamon YAMASHITA²

Abstract The role of the university forest has diversified during the last decade. Nowadays the university forest provides not only the field for the university members to study but also the chance for the public to join the academic activities. We have held the extension course to learn the names of the trees in the Sambe Forest since 1996. Our extension course consisted of the lectures, the field work and the examinations. According to the questionnaire survey of the participants after the course, most of them satisfied with the contents of the course but they felt the need for more improvement in the field trail. Since the participants preferred the field work to the indoor lecture, they sought to spend more hours in the field with well-found trail. Around half of participants won't know the Sambe Forest unless they took part in the course. It is an effective way to have the extension course for the public in order to appeal the potential value of the university forest to satisfy the social needs. As the participants required us to make it easier to visit the university facilities, e.g., the university forest and the university farm, we should accept their visit even for the recreational purpose under a certain condition.

Key Words: Extension Course, Field Work, Questionnaire Survey, Social Needs, University Forest.

はじめに

地域社会に開かれた大学が求められる中で、地域住民を対象とした大学教職員の活動は今後ますます重要となってくると考えられる。そのような活動の中で公開講座は大学のもつ学術的資産を地域住民に積極的に還元しようとするもので、大学の対外活動の中心といえる。本学の公開講座についても一層の充実が求められるところであ

る。また、都市住民をはじめとした市民の自然志向に応えるためには、大学演習林は一般の利用希望者を受け入れる設備や規則などの基盤整備を急ぐ必要がある。

現在、全国の大学演習林では学生や教官の教育研究といった従来からの活動に加え、地域交流や生涯教育のための公開講座が活発に開講されている（黒田 1996, 東京農工大学 1999）。島根大学生物資源科学部附属生物資源教育研究センター森林科学部門でも平成 8 年より、「樹木の名前を覚えよう」という主旨で公開講座を行ってきており、平成 11 年 9 月には第 4 回目の講座が開講された。

そこで、今後の参考にすべく当部門開講の公開講座に参加された受講生を対象としたアンケート調査を行い、公開講座に求められる内容や運営方法、さらには一般の社会人が大学演習林に対して持っている印象などについて

¹ 附属生物資源教育研究センター森林科学部門三瓶演習林

² 附属生物資源教育研究センター森林科学部門

¹ Sambe Forest, Forest Science Section, ERCBR, Fac. Life & Environmental Sciences, Shimane University

² Forest Science Section, ERCBR, Fac. Life & Environmental Sciences, Shimane University

て調べた。

公開講座の概要

平成11年度の公開講座「三瓶の樹木と親しもうー樹木識別法伝授ー」は、島根大学三瓶演習林と近接する国立三瓶青年の家で行われた。三瓶演習林では野外実習を、青年の家では講義を行った。いずれも島根県中央部、三瓶山の北麓に位置し、本学のある松江市からは車で約2時間の距離である。演習林は標高400~600mの範囲にあって暖帯落葉広葉樹林帯に属し、森林の上層ではコナラ、シデ類、クリ、ハクウンボクなどが、下層ではチュウゴクザサやガマズミ、クロモジ、ムラサキシキブなどが多く見られる。沖村(1967)によれば約200種の本木が出現する。

今年度の公開講座は9月3~5日の2泊3日で行われた。初日の晩には、本学教官による約2時間の講義が行われた。おもな内容は受講生の知識の程度を把握するための15問(種)のテストと、対生など語句の説明や樹木の名前に関する講義であった。テストは、講師の判断で演習林近辺にごく普通に見られる樹木の枝葉15種を2組用意し、その名前を解答用紙に記入するという形式で行った。その際、正確な和名がわからない場合、方言や一般的な呼称(ドングリやカシノキなど)でもその標本を見てわかることを何でもよいから記入してもらった。この方法により、代表的な樹木についてまったく知らないのか、正確な和名を知らないだけなのか等受講生のランク付けが可能になり、野外実習での指導が容易になる。

第2日目は三瓶演習林で野外実習を行った。前日のテストの結果をもとに判定したレベルごとに受講生30人を5班に分け、教官3人技官2人がそれぞれ講師となって1班ずつ担当した。実習の内容は、広葉樹林内に設けられたコースを歩きながら樹木ごとにその特徴・見分け方などを説明し、受講生各自で標本を採取して講義室のある青年の家に持ち帰ってもらうというものであった。さらに、30問(種)のテストを行い、その場で正解を示した。このテストの問題は初日に使った10種類の標本を流用し、新規には20種の標本を追加した。

最終日には100問の段位認定テストを行い、その成績により初~10段の段位を認定した。最終日のテストにはそれまでに行われた2回のテストで出題された35種の他に約60種の標本を採取し、いくつかの種は複数回出題した。通常の公開講座ではテストを課さないため、この段位認定テストが本講座の重要な位置を占めている

と考えられる。講座の最後にテストをすることにより、受講生自身ばかりでなく講師も到達度を数字で判断することができ、双方の励みとなる。

調査の方法

アンケート調査は56人の応募者から無作為に選ばれた受講生30人全員を対象に行った。調査票は公開講座初日にテキスト等他の資料と共に配布し、最終日に回収した。回収率は100%であった。

調査票の主な設問の内容は、1) 受講生の属性について(年齢・性別・居住地)、2) 公開講座に参加するまで(公開講座を知った方法等)ー4問、3) 公開講座終了時の感想ー10問、4) 大学演習林全体についてー8問、5) その他自由記述、と大別できる。

ほとんどの設問は多肢選択式(プリコード式)とした。自由記述の設問については調査終了後に回答をいくつかの分類コードに分類した(杉山1984)。

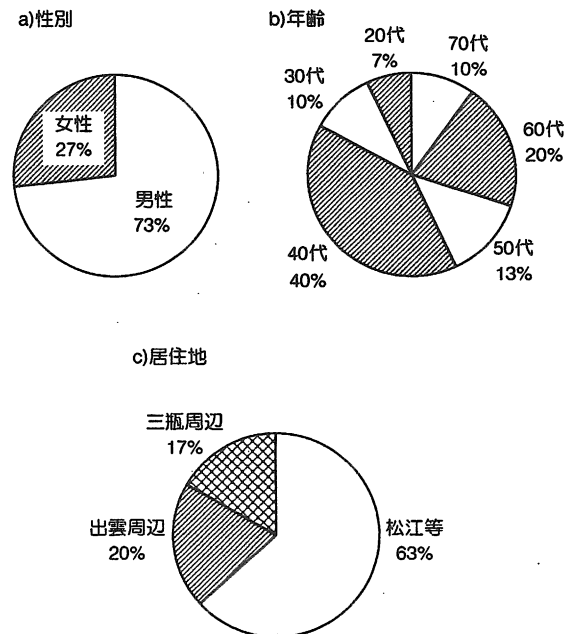


図1 受講生の性別 (a), 年齢 (b) および居住地 (c) の構成

受講生の構成について

まず受講生の構成について見てみる(図1)。応募者からの無作為抽出であることを反映して、性別、年齢、居住地とも受講生の傾向は応募者の傾向とほぼ同じであった。

性別については男性が73%、女性が27%と男性が多数を占めた。趣味の自然愛好者に加えて、建築事務所の人や自然観察指導員など仕事との繋がりで受講した人もあったようである。年齢については40代が最も多く、40代以上の人の割合は83%を占め、中高年の受講者が多かった。居住地については、直線距離で50km以上、所要時間2時間以上の松江市周辺地域からの参加が約60%を占めた。開催地との距離よりは、人口の多寡に依存した傾向がある。今回の公開講座では現地集合としたが、このようなイベントがあれば遠距離からの参加者も多く、むしろ公開講座後にそれらの人にリピーターとして演習林を利用してもらうにはどうすればよいか課題となると思われる。

公開講座に参加するきっかけ

公開講座を開催するにあたって、ダイレクト・メール(DM)の送付、新聞の折り込み広告、ポスター掲示およびホームページへの掲載の4通りの宣伝を行った。受講生がどのメディアを通して公開講座のことを知ったのかを図2に示す。最も多かったのはDMで57%、次いで新聞折り込み広告が37%であった。また、体験者等知人からのいわゆる「口コミ」で応募した受講生も17%におよぶ。DMは過去の公開講座や附属生物資源教育研究センターの催し物の参加者や応募者に送っているため、DMを見ての応募者が多くなるのはある程度予測されたが、そうではない新聞折り込み広告への反応がよいのが注目された。ホームページを見ての応募は受講生の年齢層のためか、一例もみられなかった。

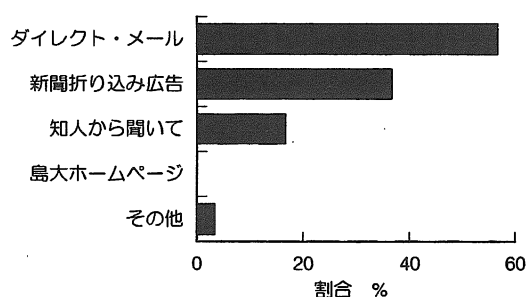


図2 公開講座を受講するきっかけとなったメディア

島根大学三瓶演習林の知名度については、過去の公開講座の受講者など「知っている」と答えた人や実際に「来たことがある」人も多かったが(63%)、地元の大学であっても37%の人が「知らなかった」と答えた。これまでの大学の一般社会に対する閉鎖的な姿勢の現れ

とも言えるが、逆に考えると今回の講座によって約40%の人が初めてその存在を知ったことになり、知名度向上の効果は大きい。演習林がどんなところかを知らなくても、公開講座の内容次第では受講生を集めることが可能であることを示唆している。

公開講座終了時の感想

1) 時期・日数・費用について 公開講座の実施時期、期間、費用(受講料6500円、食費等雑費3680円)について聞いてみたが(図3)、いずれをみても比較的高い満足度が得られた。このうち開講時期については約40%の人が「別の時期がよい」と答えたが、具体的には花や新緑の楽しめる春や紅葉の秋に開講して欲しいという希望や、春と秋といったように季節ごとに開講して欲しいという希望が多かった。また期間に関連して、仕事を休まなくてもすむように初日の集合時間(16:30~17:00)を遅くして欲しいという意見もあった。

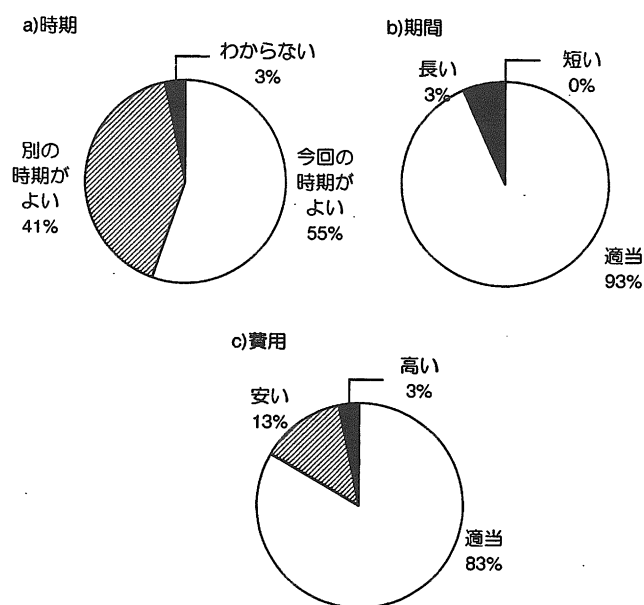


図3 公開講座の実施時期(a)、実施日数(b)および受講費用(c)に関する受講生の意見

2) 講義・実技について 講義の難易度や実技に対する満足度について聞いてみた(図4)。講義については約2/3の人が難易度は適当だったと答えたが、初心者や50代以上のの人に「難解だった」という答えが多い傾向がみられた。実技については約90%の人が「満足」ないしは「ふつう」と答えたが、実質的に1日しか山を歩かなかったのに対して、テスト後に実物を見ながら復習するためにもう一度山を歩きたいという意見もあった。講義と野外実習のバランスについて聞いてみても約半数の人が野

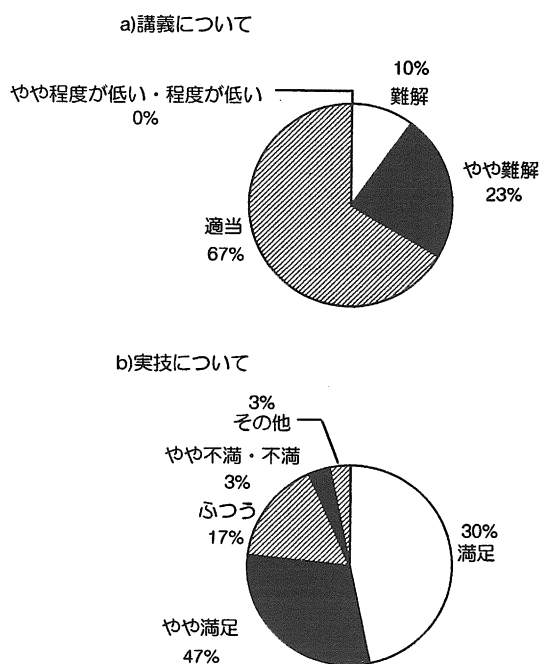


図4 公開講座の講義内容 (a) および実技内容 (b) に関する受講生の意見

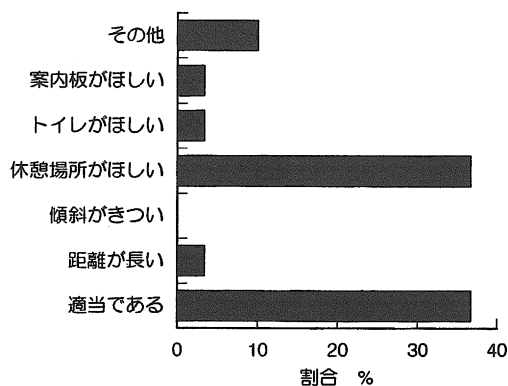


図5 野外での実技指導に使った遊歩道のコースに関する感想

外実習の時間 (割合) を増やすことを望んでおり、今後工夫を要するところであろう。

3) コースについて 次に公開講座のコースについて聞いてみた (図5)。コースはコナラ、シテ類が多い落葉広葉樹林の中に設けられ、1周約1.6kmである。傾斜がきつい場所には階段を設け、途中2ヶ所にテントをはって簡易トイレとした。コース沿いの樹木には和名、学名、簡単な説明を書いた名札をぶらさげた。最も多かった要望は、休憩場所が欲しいというものであった。コース途中で休憩用のベンチや、採取した標本を広げて整理・復習するためのテーブルあるいは小屋が欲しいといった意見があった。また上級者からは、同じような樹種が続くので別の場所も見せて欲しいという意見がある一方、初

心者からは出現樹種数が多すぎるという意見もあった。初心者と上級者は班分けが異なるだけで、あとは同じメニューをこなすことになり、両者を満足させるには工夫が必要である。逆に評価されたのは、名札が木にかかっているのがわかりやすく、個人的に来て勉強できるという点であった。

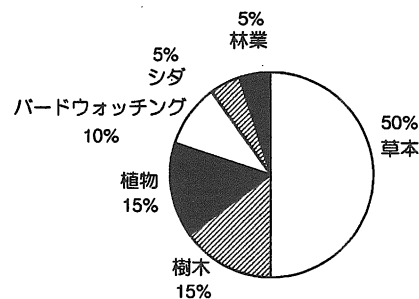


図6 今後開講を希望する公開講座の内容

4) 今後どのような講座を望むか 今後どのような公開講座の開講を望むかという設問に対しては (図6)、草本、あるいは草本を含む植物全般を対象にした講座を望む意見が半数を占めていた。その他バード・ウォッチングや林業体験といった要望もみられた。草本やバード・ウォッチングなどは演習林職員ではカバーするのが比較的難しい領域である。今後は学外または他学部から講師を招いての開講や、観察会をしたいという団体などに演習林という「場」を提供するといった可能性も考えられる。

表1 各班毎の試験の平均点の変化の様子、各試験結果を100点換算し、さらに初日の試験結果を100とした相対値として示した。

班	初日テスト	2日目テスト	本試験点数
1	100	119	117
2	100	107	112
3	100	85	114
4	100	119	141
5	100	114	176

5) 講座の効果について ここで少し受講生の感想を離れて、講義・実技の効果について検討する。初日のテスト結果により、得点上位から6人ずつを1班として野外実習を行った。その班ごとに初日のテストの得点を100としたときの2日目、最終日のテストの得点をみると (表1)、どの班でも10~70%の伸びを示した。とくに、初日に点数の低かった初級者の4班および5班の上昇率が高かった。上級者の班では、最初の点数が高いこともあり比較的低い伸び率にとどまった。また、最終日のテ

ストについて、前日のテストに出た樹種の平均正答率が53%であったのに対し、出題されなかった樹種の平均正答率は43%であった。同じ物をくり返し出題することにより、覚える機会が増えるためと考えられる。中には得点がマイナスになった人もいたが、全体としてはある程度の教育効果がえられたといえよう。誤答例について表2に示した。頻度の高いものは、クリ、クヌギおよびアベマキの3種の混同であった。とくに、クヌギとアベマキは交配し中間型を形成することが知られており、試験に供した標本によっては識別が困難であったかもしれない。

表2 段位認定試験で多く見られた誤答の例

正 答	誤 答	数
クヌギ	クリ	14
ヤブデマリ	ガマズミ属	10
カスミザクラ	他のサクラ	9
イワガラミ	他のツル	7
ウリカエデ	カエデ属	7
ミズキ	ヤマボウシ	7
クリ	クヌギ	7
アベマキ	クヌギ	7
イヌザンショウ	他のサンショウ	6
ウワミズザクラ	他のサクラ	6
キハダ	クルミ類	6
ヒメコウゾ	ヤマグワ	6
ツルウメモドキ	ウツギ	6
ホオノキ	ハウノキ	6
ハルニレ	シデ類	6

大学演習林について

最後に公開講座から少し離れて、大学演習林全体について聞いてみた。

まず他大学の公開講座に関心があるかという問いに対し90%以上の人は何らかの形で関心を持っていた(図7)。一般の人を対象にしたアンケートではないとはいえ、大学演習林の公開講座に対する需要は顕在化してきていると思われる。

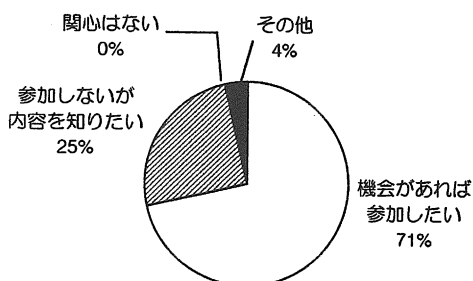


図7 他大学演習林で開催される公開講座について

また大学演習林協議会のホームページ (<http://www.uf.a.u-tokyo.ac.jp/zenen/>) を知っているかどうかを聞いた。約70%の人がその存在も知らず、アクセスしたことがある人はいなかった(図8)。これは調査対象者の年齢も影響していると思われるが、大学演習林やその公開講座に興味を持つ人は比較的年輩の世代であると思われ、今後の大学演習林のアピールについてその方法を考える必要があるだろう。すでに発行されている出版物に加え、大学演習林を紹介するパンフレットを作り、地域の生涯学習を担う組織(役所や公民館等)や教育委員会、あるいは生物学関係の研究機関に配布するといったことも考えられる。

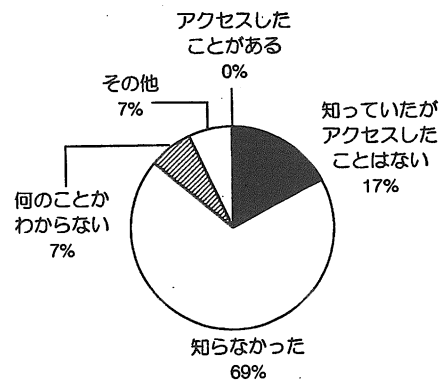


図8 全国演習林協議会のホームページについて

次に、大学演習林は何をしているところだと思ふかという質問に対する回答だが(図9)、多かった回答は「研究」と「(学生の)教育」であった。この二つについて、市民の啓発、自然保護と続き、林業という回答は3.3%であった。一般社会の認識において、演習林の役割としての生産活動は重要度が低いことの現れであると考えられる。

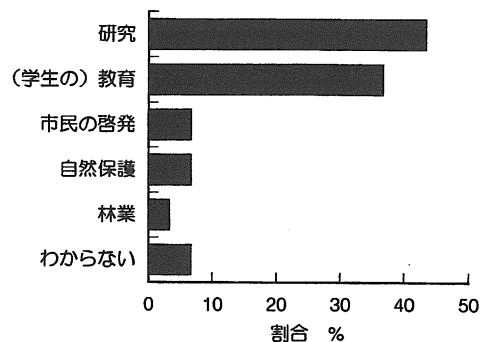


図9 大学演習林が行っている活動はどのようなものか考えるか

最後に、大学演習林に何を望むかという質問に対する回答であるが(図10)、これについては「一般への開放」という回答が大きな割合を占めた。またPR活動を求める意見や施設の充実を求める意見もあった。一般者の入林を認めている大学もあるが島根大学では認めておらず、またそれに関する規則もないのが現状である。演習林の一般への開放には野外試験に対する妨害、動植物の持ち帰り、入山者の安全など様々な問題もあるが、今後はこれを認めていくまたは積極的に推進する必要があると思われる。

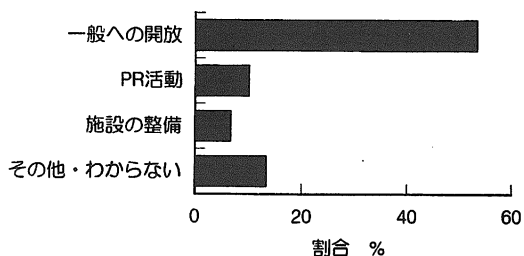


図10 今後、大学演習林に求めるものは何か

ま と め

公開講座について、あるいは大学演習林について様々な質問を試みたが、大学に対して期待されるところは大きいように思われた。研究成果・知識の還元や生涯学習・公開講座といった形の大学の対外的活動に対する社会的要請があるが、アンケート結果を見る限り、大学演習林も例外ではない。まずは、演習林という場を閉鎖されたものから開放されたものへという要望にどのように応えていくか。さらに、公開講座は、専門家ならではの経験や知識を生かし、一般の自然観察会とはまた違った良さおよび内容をアピールしていきたいところである。これからの少子化や独立行政法人化の問題を考えていく

上からも、そういった要望に答えていくことが演習林経営に活路を開くことになるであろう。

特に規模の小さい地方大学の場合、18才人口に頼らず、より社会教育に力を入れていく必要があると思われる。今回の例のように、公開講座そのものが社会から求められている大学の活動と考えられるが、また、公開講座という窓口を利用することで日々変転する「地域社会の求める大学の姿」を大学人がリアルタイムで知ることができる。つまり、社会に対する大学の働きかけという観点からすれば、公開講座は直接的および間接的効果を持つと考えられる。

謝 辞

講義室・宿舎として利用させていただいた国立三瓶青年の家に、また講師を務めていただいた片桐成夫先生、秋村喜則先生にこの場を借りて感謝の意を表す。また運営面で多大なご協力をいただいた坂本英治係長、神田政子さんをはじめとする附属生物資源教育研究センター事務部の諸氏にも併せて感謝の意を表す。

引 用 文 献

- 黒田真人(1996) 芦生演習林公開講座参加者の動向. 京都大学農学部附属演習林報告, 29, 101~106
- 沖村義人(1967) 三瓶演習林樹木誌. 島根農科大学研究報告, 15A, 89~100
- 杉山明子(1984) 現代人の統計 社会調査の基本. 林知己夫編, 朝倉書店
- 東京農工大演習林編(1999) 森の公開講座. 東京農工大学農学部附属演習林